

わが国における草山の状況について

〔江戸時代中期～後期〕

- ・ 耕地に投入する肥料として、草柴や牛馬糞による厩肥が重要であった（金肥（購入肥料）も普及し始めていたが、一部の裕福な農民に限られていた。）。
- ・ 当時の田畑の面積は300万ha程度であるが、十分な刈敷（水田に入れて肥料とする草や小枝）や秣（馬や牛の飼料とする草）を確保するためには田畑の10倍以上の草山（原野・芝山・柴山など）等の有機資源の供給源が必要であったとされ、国土の多くの部分が利用されていたと思われる。
- ・ その形態は、草原であるものや、樹高3～4mまでの松を中心とした疎林であるものなど、多様であった様子（林からの採取もあり、土地利用の分類上の草原や原野に限らなかったと思われる。）。

〔江戸時代後期～明治〕

- ・ 中国からのレンゲ（肥料作物）の導入により、導入された地域においては草肥の需要が減少したと考えられる。
- ・ 低利用となった草山等の一部は、当時増加しはじめた人口に対応するための田畑として開発されるとともに、森林化が進められた。この間、田畑の面積は、（北海道の開拓の進展とも相まって）600万haへと拡大した。

〔大正～昭和30年代〕

- ・ 大正に入り、化学肥料が生産されはじめ、昭和30年代にかけて大幅な増加となった。これにより、草肥の需要は激減し、馬の飼養頭数が減るとともに、草山は激減していったと考えられる。また森林の蓄積量が増加している。この間、田畑の面積は、ほぼ横ばいとなったものの生産性の向上により生産量は増加している。

〔現在〕

- ・ 現在は、原野や草原の面積は、国土の1%程度となり、肥料としての利用はほとんど行われていない。

参考資料：草山の語る近世 水本邦彦

植生からよむ日本人のくらし 小椋純一

肥料が変えた里山景観 中堀謙二

日本の草地面積の変遷 小椋純一

各種統計資料 ほか

わが国における焼畑耕作について

1. わが国の焼き畑

- ・ かつて日本では、全国各地で広く焼畑農業が行われていた。
- ・ 焼畑の総面積は昭和 10 年に約 77,414 町歩（約 77,000ha）であったが、昭和 25 年には約 9,533 町歩（約 9,500ha）に減少。同時期、焼畑経営農家数は、約 15.2 万戸が 11.05 万戸となり 1 戸当たりの焼畑面積が大きく減少（0.51ha → 0.08ha）。
- ・ 昭和 25～26 年を境に、景気の向上、米作農業の安定と発展などにより食糧事情が好転したことなどから、焼畑が急速に衰退。その後の高度経済成長に伴う過疎化や食生活の変化によって、加速度的に衰退が進行。
- ・ 地理的には、日本海側と四国・九州に多く、太平洋側は東北地方の北上山地、及び関東地方西部（丹沢山地）から中部地方東部（赤石山地）に小規模な焼畑が見られた。
- ・ 戦後、静岡・山梨・神奈川及び岡山・山口など、いわゆる太平洋・瀬戸内ベルト地帯周辺山地において衰退が著しく、昭和 25 年におけるわが国の焼畑は、東北・四国・九州の山地が中心。

2. わが国の焼畑の特徴

- ・ 焼畑で最も広く栽培された作物は、ソバ、ヒエ、アワ、ダイズ、アズキの 5 種。
- ・ 主要な焼畑形態は、「伝統的な主穀生産型」「商品作物栽培型」「林業前作農業型」の 3 種。
 - （1）伝統的な主穀生産型：食糧自給体制を支えることを目的とするもの。
 - （2）商品作物栽培型：チャ、クワ、コウゾ、ミツマタなどの商品作物の他、販売目的のソバ、アズキ栽培など、商品生産を目的とするもの。
 - （3）林業前作農業型：造林準備を主たる目的とし、農作物収穫を従とするもの。
- ・ 食糧事情が改善するに従い、食料生産目的から植林準備を主な目的とした林業前作農業目的に変化。

3. 伝統的な主穀生産型焼畑の地域類型

- （1）アラキ型（北上山地）：休閑期間が短く、耕起・畝立作業と施肥を伴う極めて集約的な形態を有す。主穀栽培が主。「アラキ」は、焼畑初年度呼称の「アラク（新しく）」に由来。
- （2）カノ型（奥羽・出羽山地、上越・頸城山地）：主穀生産より補助耕地としての機能を重視。焼畑経営規模も零細なものが多く、粗放的な経営形態。「カノ」は「刈り野」に由来。
- （3）ナギハタ型（飛騨越山地、赤石・丹沢山地、山陰山地）：ヒエ、アワの栽培を中心に、ソバ、ダイズ、アズキを加えた雑穀栽培型の焼畑農業。「ナギハタ」は「薙ぎ畑」に由来。
- （4）コバ型（四国山地、九州山地）：雑穀栽培型の輪作にムギ類、イモ類を加えた複合的な作物栽培。「コバ」は「木場」に由来。
- （5）根菜型（沖縄・八丈島）：ムギ、イモ、アワなどの伝統的な畑作物に重点。

（出典） 「日本の焼畑」佐々木 高明・著、古今書院（1972）
「焼畑民族文化論」野本 寛一・著、雄山閣出版（1984）